柳宗悦 ── ブレイクの影響と仏教への歴程 ──

中　村　ひろ子

（1）

William Blake の日本における受容を考えるとき、柳宗悦を避けて通ることは出来ない。[1] ブレイクの柳への影響は、単に日本におけるブレイクの詩と版画の紹介を含むブレイクの先駆的研究に留まらず、彼の思想と行動の根幹にまで及ぶと考えられるのである。

小論では柳におけるブレイクの影響を検証するに当たり、彼がブレイクから学んだ、〈二元論〉、〈直観〉、〈個性〉の三つの観点に絞ることにする。この三つの観点が、柳の長年のテーマであった二元論の克服へと収斂されるからである。検証の方法として、柳が西洋思想の受容という点に置いて恵まれた環境にあった学習院時代の教育、ブレイクの作品に直接ふれる機会を与えた Bernard Leach との出会い、そのブレイクの研究書出版を挟んでの雑誌『白樺』への投稿、を検討することで、彼の思索を跡付けながら、最終的に彼が到達した仏教思想を論じることとする。

（2）

1889年（明治22年）東京に生まれ、1961年（昭和36年）に亡くなった柳の人生は、日本が西欧化を進める一方で、アジアの盟主たらんとして、植民地主義政策のもとに近隣諸国を支配下に置き日本文化の受容を強制した時代に過ごされた。日本は西洋の文化の摂取に熱心であったが、自国の文化やアジア諸国の独自の文化を軽視する傾向にあった。そのような急激な変化を遂げる日本を経験した一人でもある柳をある評論家は「彼の活動したそれぞれの時代において、集団的熱狂から自由な人だった」[2] と評する。いわゆる西洋思想に自らを見失うこともなかったし、逆に反動的となり国粋主義思想に偏ることからも救われた。彼の場合、西洋との恵まれた出会いを青年期に経験したことが、その大きな要因ではないかと筆者は考える。

まず学習院の中等部で担任の服部他之助からはキリスト教の影響を受けた。彼が教材として取り上げた Ralph Emerson の *Representative Men*（『代表的人間像』）の中に Emanuel Swedenborg に関する一章があったことは貴重な偶然と言える。[3] というのは後に読む *The Marriage of Heaven and Hell*（『天国と地獄の結婚』）にはブレイクのスエデンボルグ批判が含まれており、この警句的散文詩理解の下地を作ったと考えられるからである。学習院では日本における哲学、宗教思想の第

一人者となる人物から教授される―ドイツ語は西田幾多郎から、英語は鈴木大拙から学ぶ―恵まれた環境にあった。特に鈴木大拙は禅思想との関連で、柳との交流は後も続いた。1909年（明治42年）当時は版画家として来日していた英国人リーチに出会い、彼を通しブレイクの作品を本格的に読むようになっていくのである。彼との出会いは、柳をブレイクに目覚めさせるだけではなく、後の民芸運動へと発展する陶芸家達との出会いにも繋がるものであった。その意味においてリーチの存在は柳にとっては極めて大きい。そのことは彼との往復書簡が証明するところである。

学習院の在校生及び卒業生によって、1910年（明治43年）同人誌『白樺』が発行されることになる。「銀の匙しか持ったことのない」[4] エリート達によって始められたこの文芸誌は、「文壇の天窓を開け放」[5] ち、自然主義で頭打ちにされていた文学的状況から、自我の発展に貢献した側面を持つと同時に、その自我に他者の自我は未だ存在しないという社会性の欠如を欠点としていた。[6]『白樺』の同人達がトルストイの文学を一つの規範としながらも、トルストイのリアリズムを素通りし、[7] むしろ武者小路実篤に代表される自己犠牲的な救済意識への転換がみられ、人道主義思想へと展開する。[8] 思想的観点から白樺派を見ると、日本最初の観念論と位置づけ、昭和にいたるまで、その影響力を保ち続けた運動として捉える向きもある。白樺派の人々は、宇宙の意志が人間の幸福を計ってくれるという信仰をもち、宇宙の意志と自分の意志の調和を、実感によって知る，日本土着の観念論であるというのだ。[9] 因みに柳は白樺派同人中殆ど唯一の学者であった。（1：749）

『白樺』第1巻第6号（1910年、明治43年）における「新しき科学」と題する論文で、心霊を解明する科学を第三の科学と呼ぶと共に、柳は宗教、哲学、科学への自らの関心を明らかにしている。この論文の中で柳とブレイクの思想が通底する点を二つ挙げておく。五官以外の感覚の存在に目を向けていること（1：18)、柳はそれを第二の意識（Sub-consciousness）あるいは潜在感覚（Subliminal-sense）と呼んだ。（1：18）ブレイクは“THERE is NO NATURAL RELIGION”で“Man’s perceptions are not bounded by organs of perception; he perceives more than sense can discover.”と主張、五官に縛られることをブレイクは強く批判する。

ブレイクの場合“the Poetic Genius”（[詩的天才]）と独自の表現を用いて、五官以外の知覚を表した。「詩的天才」は John Locke の五官による経験から観念が形成されるとした経験主義哲学に反論する形で、初期の作品“ALL RELIGIONS are ONE”や“THERE is NO NATURAL RELIGION”で用いたものであるが、その後“imagination”「想像力」と言い換えられ、同義の意味を持つ。

同論文において、William James の「恐らく物質的世界は絶対なものではない」という見解を論拠として、柳は心霊の世界 ― 不可視の世界 ― の独立的存在を認める考えを著している。（1：55）これも直観を重視し、物（民芸品）の彼方に美という抽象世界を求めた、後の柳を予兆させるものである。柳は当時自己の根本問題を霊魂や心理と科学との関係に見出していたことを認めることができる。このような柳の性向はブレイクの詩を理解するための貴重な素地であるといえよう。

文学以外での白樺派の貢献では、西洋絵画の紹介を挙げなければならない。[10] 白樺派のメンバーは度々信州に赴き講演会や西洋絵画の展覧会を開催したといわれる。その影響の下、大正7，8年に

は「白樺教育」が県下を風靡したと言われるほどであった。[11]『白樺』第３巻第１号（1912年、明治45年）に柳は「革命の画家」と題して、後期印象派の画家 — セザンヌ，ゴーギャン、マティス、ゴッホ — について論じている。柳は自己の表現こそ芸術の目的であるとしている。「芸術は人格の反映であり、個性に他ならない」という。（１：545）またマティスの芸術は宗教的体験に類似すること、理知によるものではなく、直覚の力によるとしていることが注目される。（１：562）彼の画家論はブレイクの芸術論へと発展する準備段階として捉えることが出来よう。即ち芸術に宗教的要素を認めた点や、筆者が key words のひとつとした直覚によって事物を掌握すると言った点である。宗教的要素を芸術に求めたことは柳のブレイク芸術への接近を可能にしただけではなく、後の柳の活動の backbone となるものであることが、この後の考察を通じて明らかとなるであろう。

（３）

『白樺』にブレイクの作品紹介や翻訳を載せた後、1914年（大正３年）600頁余りに及ぶ大著『ヰリアム・ブレイク』を洛陽堂より出版する。[12] 22章からなる本著はブレイクの初期の抒情詩から後期預言書までを扱うだけではなく、彼の彫版画及び水彩画をも対象とするものであった。柳の翻訳と解釈を織り交ぜ紹介したもので、今日的な研究書とは、質を異にすることは確かである。しかしながら、ブレイクの根幹をなす次の三点 — 直観（imagination）、個性（individuality）、二元論（dualism）— を詳しく論じた「第二十一章の思想家としてのブレーク」は日本における先駆的研究であるばかりでなく、柳の後の活動 — 民芸運動 — の基本理念を形作るものとなった。

柳は直観を「実在の直接経験」であり、「実在を捕らえ得る唯一の力」であると述べ、「主客の間隔を絶滅した自他未分の価値的経験」と説いた上で、この経験世界を想像界とブレイクは呼ぶという。この状態において自我と外界との合一、寂滅された個性の拡充と言い換えるが、直観にすでに筆者が取り上げようとした、個性と二元の克服の示唆が含まれていることが分かる。ここから柳は神秘主義の道にすすむのであるがこのあたりのことはリーチ宛の手紙に詳しいので注を参照されたい。[13] あるいは「直観とは想像の経験」である、さらには「直観とは真義に於いて神を味わう心」であるという。（４：323）柳が理解した「詩的天才」（the Poetic Genius）とは知覚と想像力を表わすと同時に神を体験することでもあるのだ。直観と神を見るという体験の関連付けは、柳においては後に工芸品に美のみならず、彼岸を見る体験と関わるもので、柳の特質を表すものと見ることができよう。ブレイクは『天国と地獄の結婚』で「詩的天才」を Ezekiel に“the first principle”（「第一原理」plate12-13）と語らせ、存在の根源をそこに求めた。柳は第九章で「詩的天才に神の活きた姿を認め」、「詩的天才から放射される吾々の神秘な想像力」とは「知覚の完全な開放」で、「無限相の知覚」（４：102）とはブレイクの根本原理である重要性を指摘する。更に進んで、*Jerusalem: The Emanation of The Giant Albion*（『イェルサレム』）の“For All Things Exist in the Human Imagination”をブレイクの哲学の中軸をなすとした。柳は想像とは宗教的法悦の状態をさし、純粋な認識状態を意味すると解した。「吾々の心が神と合一し、また自然に自らを没入

するとき、吾々はこの想像の世界にいるのであって，その時一切のものは永遠相において現れてくる」（4：566）とする柳の直観とは事物の真相の姿をとらえることであり、その時人は神を見ることになるのだ。ブレイクの作品に見出した直観こそは、後に民芸の美の発見において柳が依拠する principle となるのである。

1916年（大正5年）柳は朝鮮・中国への旅に出る。その旅で、柳は朝鮮芸術の特徴を線（line）に見る一方で中国陶器の有する形（form）にそれぞれの特徴の相違を見出だす。「線」と「形」の区別の仕方も、彫版画家であった、ブレイクがしばしば作品の中で言及した語であることを、考えるとき、ブレイク研究から「線」と「形」の重要性を柳が学んでいたことが分かる。（4：218）朝鮮で李朝期の大壺を目にしたとき、キーツがギリシャの壺を見て書いた詩を想起しながら、彼は次のように語っている。「この一つの壺を想う事は、直ちに此の世を思ひ心を思ひ、彼岸の世を想う意味があろう.....かかる宗教の域に達し得た作」（6：70）と表し、無名の壺を絶賛する。

ブレイクについての著作を発表したあとの柳は、1915年（大正4年）から1919年（大正8年）にかけて宗教（あるいは神）や神秘道についての思索に傾注する。1916年の『白樺』第8巻第3号の「宗教的無」では、仏教、道教の思想への関心を示し、「真理は味はるべきであって知る事ではない.....今日の言葉にすれば「直観」である、「思惟以前」」（注2：18）であると述べ、ブレイクから学んだ直観に仏教的絶対の性―無や空―を結びつけた。宗教的真理とは絶対の理解であって、絶対の理解には時間と空間とが関わると論究をすすめ、「此現在にこそ永遠がある。一瞬間もその内面の意味に於いて永劫である」（2：110）という考えに至る。ここでも柳は直観が時間の真相を理解するとしている。直観が想像力や知覚と結びついた時点で、宗教思想への柳の傾倒を示していることに留意しておきたい。

柳とブレイクを論じるとき、宗教と二元論とは切り離すことはできない。ブレイクは『天国と地獄の結婚』の中で次のように語り、彼の二元主義批判が明快に表わされる。

> All Bibles or sacred codes.　Have been the causes of the following Errors.
>
> 1. That Man has two real existing principles Viz: a Body & a Soul
> 2. That Energy.　Calld Evil. Is alone from the Body. & that Reason. Calld Good. Is alone from the Soul.[14] (plate 4)

肉体と精神、善と悪、理性と活力との対立が聖書や聖典の解釈に基づくことを指摘した上で、人間存在を精神と肉体とに分け、前者を善と見なし、後者を悪と見る二元論に異議を唱え、肉体の罪悪視を退ける。理性を善と見、精神と結び付けた１８世紀以降の理性主義に対するブレイクの批判であるばかりではなく、肉体のアナロジーとしての“Energy”「活力」“impulse”「衝動」“desire”「欲望」の肯定という当時の正統キリスト教とは異なる人間観をこの散文詩の中において示したものである。題名の“〔T〕he Marriage”「結婚」からも二元論からの脱却の示唆を読み取ることが

出来よう。他方柳もまた二元論的思考のディレンマに陥っていたことはリーチ宛の手紙が示すところである。

柳は対立するものの肯定の発想に、二元論からの脱却の糸口を見出したのである。後に柳は「肯定の詩人」と題し、Walt Whitman とブレイクとを論じている。ホイットマンは「善とよばれるものは完全である、また悪とよばれるものも、同じように完全である」と謳った。善と悪の、肉体と精神の、理性と欲望の二元を肯定することであると柳は悟る。二元論からの解放を更に進めさせることになるのが、神秘道研究であった。「神秘への愛着は理性の敗滅であり、不明への信頼である」（2：192）とし、他方理知（理性）とは「一切は知によって解決せられねばならぬ、人間の理想と満足とは不明なものの完全な討伐」（2：193）と論じた。当時の理性万能主義から一歩身を引き、むしろそのような傾向を揶揄する柳の姿が浮かぶ。西洋文化の受容とともに、曖昧なものは非として退け、論理や科学で証明されるものにのみ価値をおく当時の風潮にたいする柳なりの警告とも言える。元来心霊に興味を示しながらも、科学的であることから決別することにためらいを残していたが、ここにきて理知では解明できない人間精神の有り様を認める柳の姿勢が窺える。

理知（理性）への柳の反論を『神秘道への弁明』に聞くことが出来る。彼は「神学は理論として主義を要求する、然し宗教は起趣として主義の離脱を喚求する」（2．203）という。少し脇道にそれるが、柳が学生時代に読んだエマソンの『代表的人間像』に収められたスエデンボルグ論に目を向けたい。エマソンは「スエデンボルグ、あるいは神秘主義者」と題する章で、スエデンボルグの自然法則の普遍性を説いた功績を讃える一方で、彼のキリスト教思想が善悪の道徳主義に陥り、狭隘な神学に取り憑かれてしまったことを惜しんでいる。[15] ブレイクは当初スエデンボルグが設立した「新エルサレム教会」の会員に登録したらしいが、後に彼の *Divine Love and Wisdom*（『神の愛と智恵』）に対しブレイクは批判的な書き込みや、『天国と地獄の結婚』における明白なスエデンボルグ批判を行っている。エマソンの「彼（スエデンボルグ）の手になる天国も地獄も、個性を欠いているために退屈なものである。」（“His heavens and hells are dull, fault of want of individualism.”）[16] という批判に尽きる。理論に走り、神学の徒となったスエデンボルグは信仰の本来の在り方から大きく外れてしまっていることをエマスンは痛烈に皮肉っている。柳によれば「直下の衝動によって神（即如）との親交を内なる心に経験するのが神秘道の本旨」（2：201）[17] という。「直下の衝動」とはすなわち直観の意に他ならない。神との霊的交わりは直観のうちに実現するものであるのだ。柳は宗教についての思索に没頭し、それに関する論文発表に何年かが費やされていたとき、その後の柳の人生を方向付ける一つの体験があった。木喰上人が彫った仏像との出会いである。彼の仏像に魅了された柳は、彼が残した仏像を求めて全国を行脚するのである。彼をそこまで駆り立てたのは、深い信仰に裏付けられた者のみが作りうる仏像であることを直観したからであった。その体験について「木喰上人発見縁起」（1924年、大正13年『女性』（後に『木喰五行上人畧伝』の中の「附録上人発見の縁起に就て」に含まれる））のなかで、「私は漸く私の直観を信じていいようになったのです。（直観が美の本質的な要素だという見解はもはや私にとっては動かすことのできない事実となってきました）」（7：256）と記している。この論文で注目すべき点は美と直観とを関連付け

たことである。柳は美とは瞬間にしてその存在の意義が見る者に開示されると考えた。では柳が木喰仏像の何に美を見出したかであるが、彼は次のように説明している。

> 一言で言えば極めて地方的な郷土的な民間的なもの、自然の中から湧き上がる作為なき製品に、真の美があり、法則があるということに留意してきました.....かかる私にとって、彫刻に於いて民衆的特色の著しい上人の作が、異常な魅力を以て私に迫ったのは云う迄もありません。[18]（7：257）

名もなき作者によって、無心に作られた素朴な物に真の美しさが現れると柳は考えた。木喰上人の仏像が柳の心を捉えて放さなかたもう一つの要素がある。

木喰上人の仏像に出会う前の1921年（大正10年）に『白樺』第12巻第11号の「ゴッシクの芸術」において、中世の芸術が宗教と一体化したものであったことにふれ、「工芸家は神学者の如く物質を精神化することに於いて優れてあった.....芸術は同時に教書であり、数理であり、象徴的法典であった」（1：612－13）と論じた。彼は芸術と宗教とが結合したゴシック期を一つの理想としたが、これもブレイクの影響の表れのひとつである。（4：370）ブレイクはゴシック芸術への礼賛を惜しまなかった。数学的なギリシャ様式と生きたゴシック様式を対比的に描き、ゴシックを称えたのが以下の有名な詩行である。

> “Mathematic Form is Eternal in the Reasoning Memory.
> Living Form is Eternal Existence.
> Grecian is Mathematic Form
> *Gothic is Living Form*”（“On Virgil”）（強調筆者）

木喰上人の仏像に出会うことで、柳は自分の進むべき道を見出したと述べている。柳の直観はここにきて美の発見のために依拠すべき直感力の役割を担う。「宗教と美には同一原理が働いていること」[19]を知ったのである。彼がいう美とは無心で且つ宗教心を伝えるものでそれらに彼の目は向けられた。ブレイクに学んだ直観が柳独特の信念へと変容するのである。

「民芸運動は何に寄与したか」（昭和19年雑誌『工芸』第115号）の中で、柳は民芸運動が「直観的な出発」であったこと、「知るより前に見たことは正しい発足であった」と述懐している。「直観が純一である場合、迷いのない信念を伴うものである」ことを認め、彼らの運動が「主義の運動ではなく、信仰の運動」（10：3）であったと宣言していることからも、柳における直観の果たす重要性を認識することが出来る。

（4）

第十五章の後期預言書 *Milton a Poem in 2 Books*（『ミルトン』）を論じた章で、柳はこの作品が「神との合一、自己の寂滅、個性の拡充を歌った」（4：190）ものと解釈する。「自己寂滅」（“Self Annihilation”）はブレイクが用いた表現であるが、柳はこの表現に強い衝撃を受けたようで、第二十一章でも、再度「自己寂滅」をとりあげ、「自我と外界との合一、寂滅された個性の拡充、即ち法悦恍惚の神境は此純一な経験の高調を意味」（4：322）すると説明。寂滅に自らの追補をくわえ、「本来寂滅とは仏教思想であること、自我の否定の意味に取られる傾向があるが、本来消極的意味をもつものではない、ブレイクの場合は自己の拡充、完全な個性の表現を意味する」（4：475－75）としている。続く第十六章の『イェルサレム』については自己実現、個性の拡充、神と人との合一を預言したものであるという。また愛を人間救済の必須条件と捉え、柳は次ぎの6行を取り上げ、

Awake! Awake O sleeper of the land of shadows, wake! expand!
I am in you and you in me, mutual in love divine:
.....
I am not a God afar off, I am a brother and friend;
Within your bosoms I reside, and you reside in me:
Lo! We are One ; forgiving all Evil; Not seeking recompense
Ye are my members O ye sleepers of Beulah, land of shades!
(plate 4, 6&7, 18-21)

次のような訳のみを引用している。

「醒めよ！醒めよ！おお影の地に眠る者よ、醒めて汝を拡大せよ！.....
吾れは汝に汝は吾が裡にある、互いに愛することは神意である。
吾れは遠きに在る神ではない、吾れは汝の兄弟であり伴侶である。
汝の胸に吾は宿り汝は吾が裡に宿る。
見よ、吾等は一体である、凡ての罪を互いに許し人は酬いを求めない。
汝は吾が一部である、おお汝影の地ビューラーに眠る者よ」。
（4：214）

柳はここにブレイクの愛の思想を読み取るのである。更に「愛とは自我の寂滅である。寂滅とは完全な個性の拡充であり、流出であり実現である」と解釈する。柳の翻訳と「愛」についての解釈の中には幾つかの問題点が見られる。第一は引用の一行目の“wake! expand!”を柳は「醒めて汝を

拡大せよ」と訳し、“expand”を他動詞ととらえ、“sleeper”を目的語にいれて解釈することで、個性の拡充の考えを引き出したと考えられる。“expand”はここでは第一義的には、人が目覚めたときに四肢を伸ばす動作をさすものと考えられる。すなわち横たわった眠りの状態から、体を起こし背伸びをする人間の起床時の象徴的動作の表現である。無論ブレイクが単純にこの意味でのみ用いたはずはないので、語義については、後に論じる。第二に柳の解釈では、寂滅が個性の拡充あるいは流出と捉えられている点である。ブレイク前後の思想家を考察した第二十二章で、柳はプロティノスの流出論（‘Theory of Emanation’）に着目、流出論（説）がプロティノス哲学の枢軸であるという見解を示す。「此世界は神の流出と神への流入とからなる美しい循環である」こと、自己寂滅とは「直観によって、実体に自己を没入」（4：362）することであるという。

「自己寂滅」はブレイクが *The Four Zoas*（『四つのゾア』）のなかで最初に用いた表現であるが『ミルトン』では更に明確な意味を担って使用されている。例えば柳も引用している plate 38〔43〕では次のように表されている

> .....know thou: I come to Self Annihilation
> Such are the Laws of Eternity that each shall mutually
> Annihilate himself for others good, as I for thee〔.〕
> .....
> Mine is to teach Men to despise death & to go on
> In fearless majesty annihilating Self, laughing to scorn
> Thy Laws & terrors, shaking down thy Synagogues as webs（34-36, 40-42）

ブレイクの場合は「自己滅却」は「自我」（“selfhood”もしくは“（the）self”）[20]からの開放を意味し、その結果として他者を受容する自己にいたることを説いた箇所であると筆者は考える。そしてキリスト教が死の恐怖や教義で人間を縛りつけることで彼らの精神を支配する機能を果たした教会組織を批判したものであると。ブレイクにおいて“（the）self”および“selfhood”はともに「自我」を指し、認識の主体としての自己の絶対性と言う西洋の近代哲学にたいする反論であるのだ。自我とは閉ざされた空間を表し、[21]それからの開放を実現するために、自己の分裂した諸相（aspects）との合一を目指すことを歌った詩が『ミルトン』であると考える。

先に言及した『イェルサレム』における expand には *OED* に“To ‘open out’；to grow communicative”（intransitive, 2 b）の語義があることからも、第二義的に閉じられた自己を開放し、他者の声（イエスもしくは語り手としてのブレイク）に眠れる巨人アルビオンの流出であるイェルサレムが耳傾けることを示唆する語と解釈することが可能であろう。

上記に引用した『ミルトン』からの箇所を、柳は「愛とは主客の融和である。個性と個性との合一である.....吾々が全自然に普及し拡充する経験」であり、ブレイクの「自己寂滅」（‘Self Annihilation’）とはこのことであると解する。[22]さて「自己滅却」（Self Annihilation）と「（自己の）

拡充」（expand）は撞着語法となっていないだろうか。[23] *OED* によれば、annihilation は、1. To reduce to non-existence, blot out of existence あるいは2. To make null, and void と定義される。expand が先に言及したように外に向っていく方向性を示すのに対し、Self Annihilation はむしろ内へと向う、精神活動としては逆のベクトルを表わすのではないだろうか。柳は個性が拡充することで、人間と神が合一すると考えるが、ブレイクは分裂した自己が統合されることによって、神との合一は果たされるとする。分裂した自己の回復後の神との合一に至るまでのプロセス、あるいは闘いが『ミルトン』のテーマである。即ちミルトンの中の女性性であるオロロンの流出で、ユリゼン的自我の支配に陥った彼が、オロロンと合一することで自己の全体性を回復、イエスと一体となることを歌った詩であると考えられる。ブレイクが「自己寂滅」をどのような意味で用いたかは『ミルトン』の次の箇所に読み取ることが出来よう。

To cast off Rational Demonstration by Faith in the Saviour
To cast off the rotten rags of Memory by Inspiraton
To cast off Bacon, Locke & Newton from Albions covering
To take off his filthy garments, & clothe him with Imagination
(plate41［48］, 3-6)

ユリゼンが体現する理性の衣を捨て去ること、即ちベーコン、ロックの経験主義哲学やニュートンの数学的合理主義から脱し、代わって想像力を身に纏うことであると。ここから我々は東洋的な自己滅却の意味を読み取ることは出来ない。ブレイクの自我は西洋的「個」の概念と結びついたものであることは否めない。ただし“selfhood”や“the self”と“individuality”との区別を明らかにしておかなければならない。前者は否定されるべきものだが、後者の「個性」もしくは「固有性」は肯定されるものでとあるとブレイクは考える。以下の 2 例がそのことを端的に示す。

(1) “States Change: but Individual Identity never change nor cease：”（*Milton,* plate 32［35］, 23）
(2) “Lots Wife being Changed into Pillar of Salt alludes to the Mortal Body being renderd a Permanent Statue but not Changed or Transformed into Another Identity while it retains its own Individuality.”（*A Vision of The Last Judgment,* page 79）

「固有性」に対する彼の考えを集約したものである。ブレイクが繰り返し批難したのは、認識の主体としての自己の絶対化である。そこに陥った状態をサタンあるいはユリゼンと呼び、否定的に描いたことを銘記しなければならない。むしろ自己寂滅を個性の拡充と解釈する柳のとらえ方に矛盾

が含まれていないだろうか。柳は寂滅を「個性」と関連させようとするあまり、牽強付会に陥っているとおもわれるのだ。その理由として柳が神秘思想としての仏教への心理的傾斜が既に始まっていたと考えられるからである。[24]「直観」で論じたように「自己寂滅」からも柳は二元論からの脱却の糸口を得た。第二十一章で西洋思想における二元論は一方の肯定であり他方の否定という矛盾を伴うが、ブレイクは二元的対立を同時に肯定する立場をとったと論じる。ブレイクの思想を対立する二者の「是認と両立」、あるいは「相互補助的関係」と解する柳は彼の「対立の思想」を捉え切っているばかりでなく、自らも二元論の呪縛から解放されることになるのである。「肯定の二詩人」と題して、ブレイク同様ホイットマンも二元論に同様の見解を有していたことを論じている。二元論からの脱却と繋がる「個性」についての、柳の見解の変化を以下に辿ることにする。

（5）

筆者がキーワードの一つとして挙げた「個性」について、柳は当初の「個性」賛美から、「非個性」の思想を持つに至る思想的遍歴を示す。工芸あるいは民芸の価値を認め、その発見の行脚をつづけながら彼の思索は「見る美術」「用いる工芸」の差異の発見に及ぶのである。柳は美術と工芸が区別されない信仰の対象としての工芸には個性が主張されないことに気づく。彼は個性の美しさではなく非個人的な美しさを認めるようになる。美術は「文芸復興」期から生まれ、個性が重視されることになった。美術が工芸から独立する要因の一つとして宗教の形骸化を柳は挙げる。神中心の思想から人間が知識によって全てを判断する人間中心の思想へと転換したのであると（9：26）。

柳もブレイクについての著書を表して暫くは個性重視を示している。しかしながら先にも言及したように、その後の宗教的思索の過程において発表した、1923年（大正12年）の『神に就いて』ではキリスト教的要素も見受けられるが、すでに仏教への傾倒は明らかである。特に親鸞の教えは柳を他力に開眼させる契機となる。自らを空しくするとき、即ち神に向かって受動的であるときに、神の能動的力が働く（3：256）とする柳の言葉は、他力思想への道程を予示してはいまいか。1927－28年（昭和2－3年）に発表した『工芸の道』で「漸く模索し得た最後の道「他力道」の深さと美しさ」（8：62）を発見したと仏教への帰依を表明することになるのである。東洋思想 — 仏教思想 — への転換は、宗教的思索という観念のみから導き出されたものではない。民芸運動をとおして、朝鮮、中国の工芸のみならず、アイヌや沖縄と言った余り注目されることのなかった日本全土の工芸品や伝統文化の擁護といった体験によって裏付けられたものであること忘れてはならない。

年代が前後するが、再度1916年の柳の朝鮮への旅に戻ろう。そこで見た李朝の大壺を彼は日記に「如何なる陶工がこの永遠の作を生んだのだろう」と記す。（6：69）その後柳は朝鮮民族美術館の設立に努力する。当時日本政府は朝鮮を併合し、日本への属国化をはかろうとして、日本の文化・教育を彼らに強要する政策をとるなかで、朝鮮の伝統工芸の評価を堂々と打ち出したことは、基本的には柳の平和思想がさせたことであろうが、[25]美を介して国境を越えた人間同士の相互理解の可能性を信じた故の行為と考えられる。[26]

朝鮮への旅の後、柳は民衆的な作品（後にこれらを「下手物」と呼び、いわゆる芸術品の「上手物」と区別する）に引き寄せられるようになっていく。1923年の木喰上人作の仏像との出会いから、柳は彼の仏像作品を求めての全国を巡る調査を行うが、柳をそこまで駆り立てたのは、「芸術と宗教とが深く編みなされている世界に心誘われ」（7：257）たからであった。

彼は日本の工芸品 — 名もなき工人が作った作品 — に彼のいう「下手物」の〈用の美〉を認めるに至り、1926年（大正15年）『日本民芸美術館』設立に立ち上がる。無名の工人の作品は、作為がなく、健康であり、自由である。そのような工芸品（民芸品）の発掘と評価および、工芸の伝統技術の保護と継承を求めていく民芸運動は始まった。

「無名の民衆が支え得た美の深さがかってあったことを忘れてはならない」。（9：205）[27] その美の深さに柳は宗教性を求めた。何故無名の工人がそのような美を生み出したのかの問いかけに、柳はつぎのように応えている。

> The beauty of folkcraft is the kind that comes from dependence on the Other Power. Natural material, natural process, and an accepting heart—these are the ingredients necessary at the birth of folkcrafts. Hence it is the kind of beauty that saves us. The craftsman has not the power to save himself. It is nature that does the saving, and therefore whatever is made is lovely.[28]

工人が扱う素材（自然）と受け継がれてきた技術（伝統）に心を預け無心の状態で作るとき、美しい工芸品ができるだけではなく、それは人を救う力をも持つという。ここには柳のもう一つの特徴が示されている、即ち美と宗教 —「救い」— とを結びつけたことである。これもブレイクの影響の一つとして認めることができよう。後期預言書『ミルトン』や『イェルサレム』でブレイクは「相互の許し」（“mutual forgiveness”）や「救い」（“salvation”）に言及しているが、このことを柳は見逃していない。[29] ということは、ブレイクの影響は柳のほぼ一生に及んでいると解することが出来る。民器の美しさが彼をとらえるのは「凡夫成仏の教えの活きた姿」（18：316）を見たからだというのだ。美は「仏心」そのものであるから、それを見る者は自ずと煩悩を解かれ、自在となり、解脱の境地に達する事が出来ると柳は考えた。言い換えれば民（芸）器を通して宗教的境地に達するところに柳の独自性があるといえよう。[30]

浄土宗の中心経典『大無量寿経』から読み取った〈不二〉[31] の思想は二元論の解決のみならず、一つの境地へ柳を導いた。この経典から美醜の二相を越えた〈不二の美〉の理論的根拠を導き出し、「美の一宗」は建てられて良いという「美の王国」建設宣言ともいうべきものを発表するのである。（19：26）美によって人が救われ、美によって人間の心が一つとなる宗教を開くべきだというのだ。

柳のこの宣言は朝鮮や中国の陶磁器の美しさ、木喰上人の無心の美を具えた仏像、その後の民芸運動を通して出会った伝統的な民芸、工芸に健康的な〈用の美〉を見出した直接体験と宗教的思索とが糾われた〈信美一如〉の思想[32]が根底に存在したからこそ生まれたものである。

（6）

後期印象派の画家達の絵画の個性的独創性の賞賛に始まり、ブレイク固有の「個」の思想から柳の視線は民衆へと移る。宗教的思索から仏教思想へと傾倒を深め、自己の個性に依存した芸術の創造、彼の言葉を借りれば自力から、自然と伝統によって、作為なく作られる他力的民器が持つ〈美〉と〈用〉に価値を置くようになる。一握りの天才によって生み出される芸術品は結果的には作品の差別化を生み，無闇な独創性を追求し、異常な作品を生み出すことになる。他方今まで貶められてきた工芸品は実用と多数と廉価を特質とし、我々日常生活と関わる品物である。用に即しての美を持つ実用工芸の復活と向上は、「美の王国」の建設には欠かせない物であるとの信念があった。イギリスにおいて同様に伝統工芸の復活で活躍した William Morris が芸術（創造）行為による人間教育を *The Beauty of Life*（『生活の美』）の中で説いた。[33]それに対し柳は倫理性や宗教性を含む文化運動としての民芸運動を目指したのである。（10：21）個人の個性ではなく民族の個性の発見という、[34]思想家としての柳の大きさを示すことにもなるのである。『キリアム・ブレーク』を発表以来、柳は宗教および哲学の考察に没頭、多くの論文を発表するが、そこには大きな命題 — 西洋の宗教思想（キリスト教）と東洋の宗教思想（仏教）との比較と差異が論じられている。彼は次のように述べている。

> 東洋の思索によって、却って西欧の思想の欠如を補い又は改造する場合がないであろうか.....特に思想に関する事に於いては、将来東西の結合と言う事が、最も意味深い結果を持ち来すのではあるまいか。.....私はキリスト教や又は偉大なキリスト教徒の深い生活を忘れるものではない。但し東洋にこそ種に於いて量において尽きない宗教的経験や思索があったと想うのである。（3：103＆105）

青年期の恵まれた西洋思想との出会いと、その後の宗教的思索や民芸運動の経験を経て、柳が到達したのは東洋の仏教思想であった。その転換点となったのがブレイクの作品と思想であった。宗教家ブレイクとして捉えることがなかったならば、柳の人生は異なったものとなっていたであろう。[35]西洋をよく知り、東洋の思想の深さを識った知識人として、対等な立場に立ち、東洋と西洋の理想的融合を模索していたことは先の引用からも推察できる。柳の現代的価値もそこにあると考える。

ブレイクは神との合一に至るには、分裂あるいは流出した精神の統合が行われることで人間の全体性は回復され、瞬間的ではあるが、神との合一が果たされるまでの精神的変容の過程を描いた。

後期預言書には、激動の時代に生きる詩人としての使命感さえ感じられるのである。だからこそ彼は“I must Create a System, or be slave'd by another Mans”と言ったのだ。彼のいう「体系」とはブレイク独自の「新しい人間像（イエス像）」を創りあげることと言えよう。他方柳は「品物に於ける衆生済度が果たされねばならぬ」(19：26）という。〈用〉の美をもつ民器（工芸品）の日常生活の浸透こそが、救済の道と考えたのであった。柳も又民芸を「体系」づけたのである。[36]

本稿は2003年11月29日－30日京都大学で開催されたブレイク国際学会において口頭発表したものを、加筆・修正したものである。

（注）

1　ブレイクの日本における受容については松島正一『ブレイクの思想と近代―ブレイクを読む』（北星堂，2003），221－76で詳細に論じられている。

2　鶴見俊輔編『柳宗悦集』近代日本思想体系 24（筑摩書房，1975），425。

3　寿岳文章他編『柳宗悦全集』22巻（筑摩書房，1981-92），１巻，460。以下柳の作品の引用は全てこの版による。以降の引用については本文中に巻数と頁数とを記した。

4　本多秋五『「白樺」派の文学』（新潮文庫）（新潮社，1973），78。

5　同上，79。

6　同上，106。

7　同上，93。

8　同上，132。

9　久野収，鶴見俊輔『現代日本の思想―その五の渦―』（岩波新書，1998），2-5。

10　本多，41。

11　日本文学研究資料刊行会編　『白樺派文学―日本文学研究資料叢書―』（有精堂，1974），282。

12　柳が読んだブレイクのテクストは John Sampson 校訂の *The Poetical Works of William Blake,* 1913および1905年版と、『ミルトン』、『イェルサレム』については、E.R.D. Maclagan and A.G.B. Russell 校訂の *Milton* と *Jerusalem* を用い、他の作品については、E.J. Ellis 校訂の *The Poetical Works of William Blake,* 1906を用いたという。（４：629）

13　1915年11月８日付けのリーチ宛の手紙に次のように柳は認めている。

...As you know already, I have had much interest in Christian Mysticism, partly because from my own nature, partly from my study in Blake. I have lingered so long in the dual phenomena of this world & struggled against this tremendous Divorce—the duality of mind & body, heaven & hell, God & man etc.etc. How to escape, or better to say emancipate, or how to write, or organize these dualisms have been my constant endeavour for my intellectual as well as emotional demands. In those days I met Blake. The result of it is expressed in

my laborious yet joyous work on that strange and great world-genius. It was really my fresh start and I searched the further answer in Christendom, where the flower of Mysticism blooms so luxuriously....(21：1.671-72)

14 引用するブレイクの作品は全て David V. Erdman ed., *The Complete Poetry and Prose of William Blake* (Univ. of California, 1982)による。

15 Joseph Slater et al., *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson* 4 vols. (Cambridge: The Belknap Press, 1987), IV, 51-82.

16 Ibid., 75.

17 阿満利麿はこの考えをエマソンから学んだと指摘する。『柳宗悦　美の菩薩』(リブロポート，1987)，64。

18 *Lyrical Ballads* の第二版の序において日常生活から題材を取り上げ、実際に用いられている言語で詩作する目的を Wordsworth が説明している部分と一脈通じるものがあるのではないかと考える。ワーズワスが自然と日常的に関わる素朴な農民や民衆に人間本来の情緒が育まれ、彼らこそ自然の持つ美しさと結びついた存在であることを強調した点である。"Humble and rustic life was generally chosen,... ; because in that condition of life our elementary feelings co-exist in a state of greater simplicity, and consequently, may be more accurately contemplated, and more forcibly communicated...; and, lastly, because in that condition the passions of men are incorporated with the beautiful and permanent forms of nature." Ernest de Selincourt and Helen Darbishire, eds., *The Poetical Works of William Wordsworth,* 5 vols. (Oxford: OUP, 1940-49), II, 386-87.

19 阿満，85。

20 "selfhood" を論じた主な研究として Northrop Frye, *Fearful Symmetry* (1969; rpt. New Jersey: Princeton Univ. Press, 1974), Thomas J. J. Altizer, *The New Apocalypse: the Radical Christian Vision of William Blake* (Michigan State Univ. Press, 1967), Morton D. Paley, *Energy and the Imagination: A Study of the Development of Blake's Thought* (Oxford: Clarendon Press, 1970), Diana Hume George, *Blake and Freud* (Ithaca: Cornell Univ. Press, 1980), Jerry Caris Godard, *Mental forms Creating: William Blake Anticipates Freud, Jung, and Rank* (Lanham: Univ. Press of America, 1985), Harold Pagliaro, *Selfhood and Redemption in Blake's Songs* (London: The Pennsylvania State Univ. Press, 1987), Jeanne Moskal, *Blake, Ethics, and Forgiveness* (Tuscaloosa: The Univ. of Alabama, 1994) がある。 Pagliaro をのぞいては Satan, reason, Urizen と結びつけて解釈されている。その中で Paley(154) は "selfhood" を Jack Roos が1951年に既に指摘した Boehme の 'Selbheit' の英訳であり、"the unregenerate ego" を意味するという解釈が注目される。

21 Peter Otto, *Constructive Vision and Visionary Deconstruction: Los, Eternity, and the Productions of Time in the Later Poetry of William Blake* (Oxford: Clarendon Press, 1991), 18 Otto は、フランシス・ベーコンによって進められた科学的方法とは、(論理的に考える) 自己という閉じられた内部世界の中に真理の場所を確認すると指摘する。

22 先に "selfhood" もしくは "(the) self" で言及した研究者達は Frye と Paley を除き "self-annihilation"

を取り上げている。Pagliaro は forgiveness（「許し」）と解し、George は self-sacrifice ととらえ、Altizer は self-negation と解釈する。“self-annihilation” のみを取り上げた Jon Mee, *Romanticism, Enthusiasm, and Regulation: Poetics and the Policing of Culture in the Romantic Period*（Oxford: OUP, 2003），283-84は“self-annihilation”が David Hartley を出典の一つであると指摘すると共に、『イェルサレム』のテキストの混乱は詩の中における自己滅却というテーマの結果としてみられるべきという見解を示し興味深い。Brenda S. Webster, *Blake's Prophetic Psychology*（Athens: The Univ. of Georgia Press, 1983），267は『ミルトン』における“self-annihilation”はミルトンの性的熱情の自発的消滅を示唆するものと解釈。

23　由良君美も同様の指摘を行っている。（4：707）

24　先の注で引用した1915年11月８日付けのリーチ宛の手紙の中で次のように語り、日本の神秘思想としての禅への賞讃を述べていることからも、既に仏教への傾倒が始まっていたことが分る。

By mysticism I mean the religious temper which claims the direct unity with Reality—immediate communion with One...But broadly speaking, by *Christian Mysticism* we understand the temper which aims at the immediate unity of the *self* with *God*. By God they usually mean the *transcendental God*, which I regard the most unfavorable conception for the human being... Naturally transcendency implies *independency* for them, and they say God is independent from us and *made* this world after His Images...Why can we not say God is pantheistic as well as monotheistic? When I came to these conclusions for the various questions, I, by the grace of fortune, met *Zen*. It was the oil to the fire. I have never tasted the spirit of the Orientals so strong and fresh as that time. I thanked that I was born in Japan.（Yanagi's emphasis）(21:1. 670-71)

25　当時の時代背景や文化的環境の視点から、柳の思想についての包括的な研究を中見真理『柳宗悦：時代と思想』（東京大学出版会，2003）は行っており、柳の現代における再評価として、貴重な研究書である。

26　『朝鮮とその芸術』（1922年、大正11年）の中の「朝鮮人を想ふ」の中で「国と国とを交び人と人とを近づけるのは科学ではなく芸術である。政治ではなく宗教である。知ではなく情である。」と述べている。（6：31）

27　柳の「民衆」の理想概念は、他力によって無心に美を生み出した中世の篤信の民衆であったが、しばしば近代のおくれた地域の工人と同一視され、後の混乱を引き起こしたと中見（143）は指摘する。

28　Soetsu Yanagi, *The Unknown Craftsman: A Japanese Insight into Beauty*（Kodansha International, 1989），200.

29　柳は『ミルトン』や『イェルサレム』で言及された“forgiveness”や“salvation”の問題に深い関心を抱き、ことに“mutual forgiveness”をブレイクが讃えた唯一の道徳としている。（4：218）またこれら二つについて、第二十一章の「思想家としてのブレーク」でも論じている。（4：348－58）「神に就いて」では更に議論を深めている。（3：308－30）

30　阿満は「美を仲立ちとした宗教がこれからの宗教」であり、「有形なものに即して見えないものに触

れる道がもとめられてもよいのではないか」と柳の思想に理解を示す。(116) 一方酒井哲朗『柳宗悦展』（カタログ）(三重県立美術館，1997)，13は「柳宗悦の「民芸」という近代における反近代の美の規範学」と呼んで、柳の主張にたいし否定的ともとれる見解を著す。

31　柳は日本のみならず、海外で工芸品展を開催したり、また仏教美術に関する講演を行い、民芸運動を広く世界に広めていった。「不二」については、1952年イギリス、デボン州における「ダーティントン国際工芸家会議」でつぎのように、説明している。“Oneness is apt to be construed as opposed to duality and hence understood in relative terms.　Buddha is the name applied to a person who has attained this state of non-duality. Buddha is the therefore is not the Creator as opposed to the Created, but is the whole, the integrity over and above such distinction. It is the state in which that which creates and that which is created have not yet been differentiated.　The Creator presupposes the Created, and therefore is still dualistic in nature. In Buddhism, this Undifferentiated or the Non-dual is assumed to be the inherent nature of humanity.　All discipline in Buddhism has in view the accomplishing of this Non-dual entirety. To lie peacefully in this Non-dual state for ever is the meaning of the expression “Entering into Nirvana”, which is the same as “Attaining Buddhahood.” ダーティントン・ホール＆ピーター・コックス編『ダーティントン国際工芸家会議報告書 — 陶芸と染織：1952年—』(思文閣出版，2003)，404。

32　〈信美一如〉は「禅と美」のなかで、「信に就いての言葉はやがて又美についての言葉であることに気づくであろう.....究竟の相を追えば美も聖も一如である」と述べていることから導き出された。(22：1.81)

33　*The Collected Works of William Morris* with introduction by May Morris, 24 vols.(London：Longmans Green, 1910-1915)，XXII, 51-80. 又“The Art of People”(『民衆の芸術』) においては、民衆によって作られた美術品について論じており、柳の民芸運動に少なからぬ影響を与えたと考えられる。*The Collected Works of William Morris*, XXII, 28-50. しかしモーリスの運動が結局は新興中産階級の家を飾る芸術的な家具・調度品となったところから彼が美術化された工芸品を作り出したという柳の批判が生まれるのである。(8：73)

34　阿満，33。

35　柳はブレイクを「最も至純な又最も偉大な宗教家」と認めている。(4：161) 及び水尾比呂志『評伝　柳宗悦』(筑摩書房，1992)，305は「ブレイクの芸術も、朝鮮の工芸も茶器も、すべて彼の眼を惹き心を捉えたのは、それらの美となって具現されている宗教性」であるとする。

36　岡村吉右衛門『柳宗悦と初期民芸運動』(玉川大学出版部，1991)，40。